

マスメディアの中の宗教性 グレゴール・T・ガートルズ



儀式と儀礼

ホピ族の雨乞いのダンスのリズムから司祭や聖体拝領者の儀礼的動作に至るまで、儀礼は人間の行為に深く根差している。社会学者や人類学者の研究は、宗教共同体がどのようにして集団に超越的なリアリティを付与するさまざまなパターン化された様式を發展させたかを明らかにしてきた。儀礼や礼拝の対象を認めない共同体においてさえ、言葉、音楽、動作の反復によって、崇拜の意を表現する。また、儀礼の複雑さと科学技術の發達の

度合とは、必ずしも関係があるわけではないことも明らかである。最も精緻な儀礼パターンが、最も単純な物質文化の中に見いだされることもある。例えば、初期のオーストラリアの原住民は技術的發達の程度は低かったものの、豊かな儀礼生活を送っていた。W・E・H・スタナーによれば、彼らの儀礼は人間の歴史をかくのごとくたらしめた二つの能力の証左である。

第一の能力は、“形而上学的才能”と呼べるだろう。自我を越え、想像力を駆使して行動する能力のことである。

あり、それによって人間は自己の“外部”に立ち、自己を“離れ”、宇宙、自己、人間を瞑想の対象にしてしまう。第二の能力は、経験に“意味付け”をし、人間のおかれた全状況を貫く何らかの“原理”を見いだす、“操作”能力である。

スタナーは、儀礼と聖なるもののイメージの源にはこうした能力があると考えた。

儀礼的行為は、重大な出来事のドラマ化であるが、社会を統合するための重要な手段でもある。最も根源的次元において、儀礼は神話を演ずるのである。過去においては、共同体の構成員の出自と運命は、宗教的政治的神話の中において与えられた。現代の科学技術社会においても、教会やシナゴグ（教会堂）がしばしば共有の原理への波長を合わせるための場となる。純粹な気持ちで参加している者にとって、儀礼は、アイデンティティの確認と再生の機会となる。歌やダンス、語りを通じて、人々は社会の中に自分の居場所を見いだす。自分がその一部を構成している全体像をより深く理解することができ

る。儀礼の神秘性や審美性は、文化によって異なるとしても、その機能は同じである。即ち、参加者に聖なるものとの関係を急激にかつ直接的に感じさせ、世界観をまさにあるものとして確認させるのである。

この章を通じて儀礼に関する二つの概念が用いられることになる。第一の仮定は、儀礼は、秩序、リズム感溢れる動き、遊戯への志向に端を発するのではないか、というものであるが、それは人間に限らず、他の生物にも同様に観察される志向である。『ホモ・ルーデンス』の中でホイジンガーは、儀礼的行為自体が、もしくはその重要な部分は、遊戯の範疇内にある、という考えを打ち出した。彼が観察したように、遊戯をまったくの精神活動と見なす観念的定義に立脚するならば、遊戯を最も宗教的な儀式としても何ら不都合はない。神学者のユーゴ・ラーナーは、『精霊の舞踏』、『恵みの遊戯』の中で同様な考えを表明している。こうして、儀礼的行為は、超自然的力との調和を求める宗教的儀礼行為のみならず、観客と競技者の連帯が形成されるという点において、プロスポーツ、アマチュアスポーツまで領域が広がるこ

となる。

「儀礼的行為における遊戯とパターン化された主題は、安定をもたらずとともに、新奇さや柔軟性を導入する手段として作用する。儀礼は、組織化、確立、保存の機能を果たす。即ち、一種の粘着作用によって、人々を互いに、また、時間の試練に生き残った生活様式に結び付けるのである。他方、儀礼の遊戯は存在と思考に新しい活路を開く。儀礼的行為は、革新的諸要素を結合させることができる。ヴィクター・ターナーが強調したように、反構造的要素が社会集団に変遷と変化をもたらすのである。⁽⁵⁾かつては、世俗的領域にあった演劇、歌、儀式が、時を経て聖なる儀式に吸収される。また、その逆もありうる。つまり、かつては聖なる儀式の一部であった象徴的体系——例えば、中世教会における演劇など——が、世俗文化の中に振り落とされて、その中で生を享受するのである。

第二の仮定は、儀礼は神秘的超自然的次元にあるというものである。伝統的宗教儀礼を通じて、人々は卓越した存在との交流を求める。演じられる神話が物事の始

りと終焉を示唆するのである。信仰によって、参列者は宇宙時間の大きさを体感し、有限の経験を越えた運命——「待ち望んでいたものの確証と目に見えないものの確信⁽⁶⁾」——を知覚する。こうした観点からすると、儀礼は、演技、知識、政治やスポーツとの類似性よりも、靈魂との関わりが深くなる。実際、こうした見解では、市民として、ファンとして参加する政治やスポーツの類の儀礼に高い価値を与えない。しかしながら、だからといって、他の生物と共有する無情な遊びとしての儀礼経験を否定するものではない。そうではなくて、儀礼の概念を拡張し、そのリズムを漠然としか知覚できない宇宙「ゲーム」にまで広がるものである。

伝統的儀礼の諸要素

テレビの持つ人々を寄せ集める儀礼的能力は、儀礼体験の基本的諸要素の分析によって明らかになる。この基本的諸要素は集められて、特殊なテレビの画面の上に格子をかぶせたような解釈構造を形成する。こうした分析手段を用いると、テレビでのコミュニケーションと儀礼

の間には、相違点のみならず、共通点の存在することがわかる。

第一の基本要素は、おそらく儀礼を理解する上で最も重要な要素である、個々人の積極的参加である。社会統合の手段として儀礼の力を体験するとき、個人は、もはや傍観的観察者ではいられない。参加者は、演じられる神話の真実の中に、実際に生きていなければならない。時間と空間を超えて、日常生活では体験し得ない審美的連帯がもたらされる。換言すれば、人間は役者であり、その身振り、動作が、劇中の他の人間に影響を及ぼすのである。

第二の要素は、儀礼が行われる空間である。儀礼空間は超現実的であり、日常生活のありふれた空間から隔離されていて、特別な行事に特にふさわしい。その神聖さは、建築上の複雑さとは無関係である。例えば、オーストラリア原住民の儀礼空間のように、単に神聖であると考えられている土地であったり、シャルトル大聖堂のように、複雑に設計された空間であったりする。

伝統的宗教の中には、儀礼空間の中に特別の境界線が

引かれていて、その中に、超自然的存在が現れるものもある。この場合、儀礼空間は、聖なる存在にふさわしいものでなければならないし、そこでは、神と人間、超自然的存在と有限の生物間の相互作用が認められるはずである。しかしながら、すべての儀礼において、超自然的存在が出現するわけではない。人間にとつての儀礼空間は、基本的に、参加者集団と繰り広げられる行為に関連づけられた場所である。本質的には、共通の信仰を持った人間同士の交わりと相互作用のための特別な場所であると言える。

第三の要素は、時間である。空間と同様、儀礼時間も、単調な時計上の時間ではなく、非日常的性質を帯びている。儀礼時間は、始まり、中間、終焉の三つの局面が慎重に構成され結合された単位である。時間の中では、誕生をもって始まりとし、究極的には、死の中に終焉を予期する。その両極の間に、中間が横たわっている。日常生活の中では、自分の全存在を認識できる瞬間はまったく存在しない。というのは、現実の時間が人間を中間時間に縛りつけているためである。人生の周期のある段階

を終える時、ある計画を完遂した時でも、その過程を流れて体験できるだけである。それに対して、儀礼では、起源と運命、始まりと終焉が対象となる。儀礼は、日常生活を越えた基準に我々を投げ入れる。日常生活の無制限で曖昧な流れは止められ、時間を超えて創造と永遠の世界に跳躍する。

非現実的な空間と時間は、儀礼の核心——共同体の生存にとって、また、その内部の個人の生存にとって、決定的な事件の演技であること——に脈絡を与える。儀礼空間、時間の中で、演じられる重大な事件は、各宗教によって異なり、その性質は各共同体の神話と歴史に関係がある。ナザレのイエスや仏陀のような歴史的人物の生涯において事件が起こった集団もある。また、人間の根源の起源と運命といった、根本的に解釈不可能と見なされている現象に「解釈」を試みる儀礼もある。例えば、オーストラリアの原住民には、虹の蛇というボロング族の創造行為を演じる儀礼がある。歴史的な人物や事件から由来したものであれ、神話から由来したものであれ、また両者の結合であれ、すべての儀礼的行為に普遍的に

まま維持される。

日常生活から非現実的空間と時間への撤退、そして儀礼的行為まで、儀礼的行為の一般的パターンは、人間を変容させることにある。儀礼に参加することによって、価値と意義の中心に触れ、個人の信仰は再生される。そして、より大きな象徴体系の中の自己の位置を確認することができる。しかし、こうした再生と確認は、個人が儀礼と神話に心から没頭したときに限って経験されるのである。第三者的観察者にとっては、儀礼は興味深くまたは目を楽しませるものであるかもしれないが、それではほとんど効果は期待できない。ホピ族の雨乞いのダンスをみる旅行者は、そこに潜在する神話を、たとえ熟知していたとしても、身をもって把握することはできないはずである。彼らインディアンは、早魃^{かんばつ}を解釈するために踊るのでもなければ、神話を叙述するためでもなく、ガイドブックを立証するためでもない。今だに神話の世界に生きるホピ族の人々にとって、儀礼と神話は相補的關係にある。彼らは自らを宇宙のリズムのなかに位置づけるために、そして、雨を降らせるために踊るのである。⁽⁷⁾

共通してみられるのは、集団の確認と、集団内での自己の確認である。儀礼行事を繰り返し演じることによって、忠誠と信仰を生み出す集団の力を確信することができる。儀礼的行為が提供するものは、単なる概念の中ではなく、世界観の中への全面的参加である。

儀礼行事の内容が伝統によって異なるように、その解釈も異なっている。回想の一形態とみなしているところもあれば、参加することによって、信者は時間の枠を超えて起源という事件の一部となり得ると考えるところもある。カトリックの儀式では、「回想」は、存在論的ニユアンスを持つ。つまり、その出来事の中に生きるために回想するのである。聖体拝領者は、秘蹟の恵みによって死、復活を経て、永遠の存在イエスと交わることができると信じている。この意味において、儀礼は世界の「解釈」以上のものである。儀礼は世界を創造し、生命が強化される聖域を作り出す。しかしながら、儀礼的行為にさまざまな存在論的解釈が加えられても、演技への参加がもたらす効果に変わりはない。それは信仰の再生の経験であるが、日常の不確実な時間、空間に戻ってもその

儀礼が改宗をもたらすこともない。儀礼の威力は、信仰者が形而上的な秩序だった動作からなる聖域から現実生活に帰還して後に発揮されるのであって、現実の凡庸な断定、不可能な属性との戦いにより強く立ち向かうことができるようになる。儀礼の反復は、伝統的象徴体系を永久化するだけでなく、人間が経験する不可解さや無秩序を受容させる作用を持っている。さらに、儀礼の反復の中で人間は次のようになると、エリアーデは示唆している。

疲れも知らず「世界」と戦い、それを組織化する。自然の風景を文化的環境に変形しようとしている……神話が、神聖な規範として現れ、人間のイニシアチブを剝奪するように見えても、実際には神話は(男と女に)刺激を与え、創造に駆り立てている。⁽⁸⁾

その空間と時間の秩序だった統一体として、儀礼は、信仰する個人に力を与え変革する。そして、彼らは再生された想像力をもって、日常世界を新しい視点から眺め

形作るようになるのである。

伝統的儀礼のテレビ放送

一九七八年十月の法王ヨハネ・パウロ二世の就任ミサという非常に感動的な宗教儀礼の最後に、法王はサン・ピエトロ広場に集まったすべての人々に祝福を述べた。この後すぐに、今一度祝福がテレビやラジオといったメディアを通じてすべての視聴者に伝えられたのである。いったい何百万人の信者がこうした方法で祝福を受けたかを正確に知ることは難しいが、もはや祝福を受けた人々がサン・ピエトロ広場にこのとき集まった人々だけに限定されることはなくなったのである。世界中のキリスト教徒は、このローマ・カトリック世界の新しい霊的指導者が行った荘厳で古風な儀礼にチャンネルを合わせ、見たのである。ある意味において、テレビを見ていた人々は、このとき儀礼に「参加していた」のであり、この参加を通じて法王の祝福を受けとったのである。

この章の第一節においては、物理的参加(訳者注・実際に儀礼に参加すること)を、儀礼を定義する要素の一つと

して論じた。しかしながら、今日ではテレビが、無数の視聴者を世界中の重要なイベントへと参加させるのである。人々は物理的に儀礼の場にいるわけではないが、今や、かつてほんの一握りの限定された人々のみが参加し得た儀礼に人々が大量に参加することのできる可能性は、前例なきほどに実現されているのである。こうした儀礼の変化はどのような性格のものであろうか。またそれはどのような結果をもたらすのだろうか。新しい要素の一つは、電子的な「儀礼の映像」である。この電子的な映像は、伝統的な儀礼において映像が担っていた手法とまったく対照的なものである。伝統的な儀礼に物理的に参加している者にとって、唯一の視覚的な映像は、礼拝具やモザイク、壁掛け、彫刻といった建造物の映像であり、そしてまた、儀礼に参加している人々の態度や身振り、動作を見ることによって心の中で形成される必然的な映像である。

テレビが紹介する超日常的な次元は、視聴者を世界の離れた場所で行われている儀礼的行為に結び付ける連続した映像である。伝統的な儀礼の秩序ある時間と空間は、

テレビ技術が通用する時間帯と空間に住む人であれば誰にでも「現前する」ものとなるのである。もちろん最初に時間的・空間的な障壁を打ち破り、大衆的な催しへの広範な参加を導いたのはラジオであった。しかし、視覚的な映像はより劇的で射程の長い効果をもたらしたのである。その衝撃が大きいのは、主には見ることでできるもの、すなわち、踊りや身振りや色そして空間的な動きが非常に多くあるからである。法王ヨハネ・パウロ二世の就任ミサは法衣や礼拝具そして人々の身振りや動作を含んで伝えられたのである。

テレビに映る儀礼の映像は、また、儀礼に物理的に参加している人々には見ることでできない視覚的光景の諸局面を伝える。儀礼に参加している人々は、一般的に、限られた範囲を動くことしか許されず、したがって、その視覚は限られたものとなる。これに対してテレビを見ている人は驚く程広い可動性を持つことになるのである。イベントの重要性にに応じて、何台ものカメラが多角的な視覚を提供してくれるのであり、したがって、建築空間や周囲の全景の息をのむような迫力ある映像や、事物や

祭司たちを接写した映像を見ることができ、また一つの行為をいくつかの異なる方向から見ることができるのである。これは就任ミサの映像を考えてみれば分かることである。もし実際にサン・ピエトロ広場にいたとすれば、はたして大聖堂のドームの複雑な建築や法王ヨハネ・パウロ二世の礼拝の身振りや表情を見ることができたであろうか。逆に、もしある人がテレビによる映像を通じて儀礼に参加するとすれば、その人は参加していると感ずるのみならず、こうした非現実的な光景を見て、また、事細かな点に関心を抱くのである。しかしながら、こうしたテレビの非現実的な映像には、体験の偽造があるということも確かである。あるいは、こうした過度の写実的な強調が、さして重要でない些細なことに対する関心を人々に呼び起こすとも論じうるであらう。例えば、テレビを見ている人々は、法王のモダンなスイス製の腕時計を見たのであり、そしてこの時計についてのニュース・キャスターの論評を聴いたのである。このような観察が儀礼の精神と秩序の中に乱入することで、テレビの視聴者は二つの異なる状況を思い浮かべたのである。す

なわち、その一つはサン・ピエトロ広場における状況であり、今一つは、テレビのイメージによって形作られた状況である。テレビを見ていた者は、技術によって代理参加を勝ちとったにもかかわらず、広場の多くの群衆の得た直接的な光景と香りと視覚とを失っていたのである。

テレビを通じての儀礼空間への参加が可能となることによつて、二つのレベルでの参加が融合することになった。聖なる場所に物理的に参加している人々に、テレビの映像を見る献身的で信仰篤い視聴者が加わったのである。ここでは、信者と信者でないものとの間に現実的な区別が生じる。信者とはこのイベントの高潮した時間のあいだ中、テレビの前から身動きもせずに見守っているものである。これに対して信者でない人々は、テレビのスイッチをつけようとしめない。またしばしば、異なる儀礼が同じ時間帯に重なるとき、テレビ局はこれらのいずれかを選択せねばならない。あるテレビ・ネットワークがプロ・フットボールの試合の放送を始め、二十分後にヨハネ・パウロ一世の葬儀を伝えるためにフット

ボール・ファンの聖なる時間を中断したとき、電話回線は怒った視聴者によつてふさがってしまったのである。

また、テレビは、儀礼の映像を伝える能力と広範な大衆の参加を可能とする能力のために、アメリカ人の政治経験においても重要な役割を果たしてきた。この非常に印象的な例は、ジョン・F・ケネディの葬儀である。衝撃を受け悲しんでいた大衆は、葬儀に参加する機会を与えられたのである。ここでのテレビの映像には、喪失の悲しみを埋めるのを助けるような神聖なそして救済的な価値が存在したのである。葬儀への参加者と同様に、テレビの視聴者は自分と悲しみをともにする他者の中に慰めを見いだしたのである。儀礼経験のこうした広がりには、同様にヒューバート・H・ハンフリーの葬儀のテレビ放送においても見られた。葬儀の色合いはそれぞれ異なっていたにせよ、いずれの場合にも儀礼の映像が演じた役割は同じものであった。つまり、儀礼の映像は大衆に対して、彼らが家族や友人そして政治家たちと葬儀を共有する機会を与えたのである。多くのアメリカの家庭において自分たちが誇りとする、愛すべき友を失ったと感じ、

また彼を記念して集いたいと願った人々は、その思いを果たしたのである。葬儀に参加したいと思った人々は儀礼の映像を通じて多くの空間に入ってしまったのである。

それは、米国会議事堂の丸天井を持つ建物の中で行われた式典の空間であり、ミネソタの教会の礼拝の空間であり、そして最終的には、ほんの少数の人々のみが物理的に参加し得る墓地の空間であった。何百万人もの人々が、一月の夕暮れの中にラッパが鳴り、葬儀の礼砲が撃たれる音を聴いたのである。おそらく儀礼の場はテレビ放送が受信される状況——すなわち、酒場、あるいは子供たちが喧嘩をしている居間、あるいは夕食が準備されている台所——によって日常化されたのである。ハンフリー上院議員を心から悼む人々はそこにいたのであるが、しかし実際、その場にはいなかったのである。つまり、彼らは儀礼を現実に見たのではなく、儀礼の映像を見たのである。しかしながら、それは彼らにとって一つの慰めとなったのである。

アメリカ人が政治的指導者の死を悲しんだ時に経験した、人々を統合し救済するこのプロセスは、伝統的な儀

礼がテレビによつて拡大され変形された例である。政治生活における今一つの例は合衆国大統領の就任式である。これまで一般に、この特殊なイベントにはごく少数の限られた人々のみが参加してきた。しかし今や何百万人もの人々がテレビを通じて参加しうるのである。ケネディの就任式のテレビ放送は、テレビの儀礼的威力について、彼の葬儀の映像が教えてくれたこととほぼ同じくらい多くのことを我々に教えてくれたのである。彼の就任式、特にその演説は、ある種の新しい政治的認識を示しているように思われた。このときその式場以外のところにいた、すなわち、電子的な儀礼空間の中にいた市民たちもこのイベントに参加することができたのである。そしてさらに、このときから政治的儀礼は変わってきていたのである。

大統領就任のさいのテレビ儀礼

今日では、新しい大統領の就任時におけるイベントのテレビ放送は——そしてさらに重要であるが——こうした放送に向けての念入りの計画は、ますます手の込んだ

ものになりつつある。就任式はアメリカの政治システムにおける最高指導者に対して正式の、そして象徴的な權威を授与する一つの制度化されたイベントである。権力の公認の儀式としては比較的短い儀式ではあるが、この儀式に関する計画や報道のために使われる時間は膨大なものとなってきているのである。これに関連した種々のイベントのテレビ放送は、就任式それ自体をも組み込んでしまうような一つの手の込んだ型を作り出してきたのである。

一九七七年には、このように報道が拡大される風潮の中で、就任式に向けて出発したジミー・カーターの支持者の列車の中での様子までもが報道されたのである。視聴者は、新大統領がジョージア州のブレインズから自分たちに手を振り、またワシントンに到着して挨拶するのを見たのである。また就任式前日の夜の「就任式前夜祭」には、民間のスポンサーによる大々的なバラエティ番組が放送され、人気のある映画スターやテレビスターが出演したのである。そして時折カメラは、大統領用の特別席で、新大統領とその家族がこのお祭り騒ぎを楽しんで

いる様子を写し出したのである。

翌朝、就任式の当日、昨夜の祝祭的な雰囲気は朝の礼拝の厳肅な雰囲気に変わった。リンカーン記念館から生放送され、式はブレインズからきたカーターの牧師の手によって始められた。しかしこの式の象徴的な主役はマーティン・ルーサー・キング牧師の父親であった。彼のおかげで、故マーティン・ルーサー・キング牧師の姿を画面に写し出すことができたのである。父と殺されたその息子の録画の生放送という特殊な合成画像によって、特に家庭でテレビを見ている視聴者のために考えられた劇的な視覚的效果がテレビを通じて生み出されたのである。

この礼拝式の後、最重要人物たちが集まって朝のコーヒーを楽しんでいるホワイトハウスの様子がテレビ画面に写し出された。そこでは、行き交う有名政治家たちがフラッシュを浴びていた。そしてまもなく就任式の会場に向けて自動車のパレードが始まり、じきにテレビには、特別席に座っている彼の家族、ビリー、リリアン嬢、アミーが、その隣から映しだされた。式それ自体は比較的

短いものであったが、それは説得力のあるそして堂々たるものであった。念入りに選択された音楽が主な参加者の入場とともに流された。この入場行進の際の軽快なリズムの曲とは対照的に、カーターが入場する際に使われた曲はゆっくりとした、威厳を感じさせる曲であった。確か、ケネディの遺体が国会議事堂の階段の下へと運ばれる際に演奏されたのも聖歌であった。そして就任の宣誓や就任演説といった就任式の主要部分の始まる時がやってきた。数時間にわたるテレビ放送の後にこの重要な国家行事に至ったわけであるが、まだこの後、数時間の放送が予定されていた。

就任式が終わってしまうと、カーターは就任式後のお祭り騒ぎにおいて自分の美的な感覚を披露した。自動車のパレードが就任式の会場を離れたとき、カーター夫妻は——自然で自発的なものであると思われる素振りである。——車から降りて、ペンシルバニア通りを歩き始めたのである。すぐに家族も加わって歩きだした。テレビには、今までいずれの大統領もしなかったことをした新しい大統領の姿が写ったのである。これによって、いつも通り

の自動車パレードが、一転して歓声を浴びての退場パレードとなったのである。この新しい大統領の行為は、自然でたまたま起こったものではなく、何週間も前から計画されていたものであるとする見方もあった。しかし、もしそうであるならば、この行為は儀礼の持つ意味を確認するものであるにすぎない。というのも実際に、儀礼というものはほとんどの場合、念入りに計画され、演じられるものだからである。

多くの視聴者にとって、就任式に関連した一連の催しの放送は退屈なものだったであろうし、また、カーターに反対する人々はその就任式に関心を持たなかったに違いない。また、ゲーム・ショーや連続テレビドラマをいつも好んで見ている視聴者は、儀礼のテレビ放送を自分たちの日常生活を邪魔するものであると思ったであろう。さらに、女権拡張論者は男性主導の儀式を見まいとしたかもしれない。しかしながら、他の人々にとって、それは魅力的で感動的な行事への視覚的な参加に他ならなかったのである。こうした放送は明らかに重要な場を潤色するものであるが、それはまた、就任式の儀礼的行

事としての重要性に対する敏感な感覚の反映なのである。儀礼的行為における重大な要素の一つは、そこに参加している人々の信仰的で献身的な態度である。政党や政治家に対して強い忠誠心を持っている市民は、就任式のテレビ放送によって、聖なる行事の参加者となったのである。

スーパー・ボールと党大会

根本的にプロテストメントの伝統のもとにある我々の国では、一般的にカトリックの文化圏に比べて、礼拝的秩序や儀礼に対して関心が表明されることは少ない。しかしながら、もし象徴化するという行為が人間存在にとって根本的なものであるならば、そしてもし儀礼が象徴化を行う一つの手段であるならば、むしろプロテストメントの環境のもとでは、儀礼は伝統的な制度の外側において行われているのである。実際にしばしば、世俗的な社会には、その世俗的な社会自体の神聖な諸形式が發展してきたのである。

世俗的な儀礼の最も明確で一般的な例の一つは、プロ

スポーツ、特にフットボールである。かつてあるスポーツ・アナウンサーがそのテレビ放送を「実生活における小さな聖域」とであると述べた。このような描写は儀礼に対する一般的で気のきいた定義であると言いうる。スーパー・ボールは儀礼化される中で究極的なものを象徴する。スーパー・ボールは——フットボールがさほど好きではない人々にとっても——キリスト教の多くの年中行事よりも親しみやすい神聖な場となっているのである。スーパー・サンデーは、多くのアメリカ人にとって五旬節や降臨節の始まりではなく、スーパー・ボール・サンデーに当たるのである。この偉大なる日はあらゆるメディアにおいて予告され、テレビ・ガイドの表紙を飾るのである。そして大統領の就任式の場合と同様に、この場合にも試合前のイベントが試合の前日の夜から始められ、その他のイベントも日曜日の朝早くから始められるのである。ハーフ・タイムに行われるいくつかの特別の出し物は、主にテレビを見ている視聴者向けに考えられたものであり、試合に続いて放送される番組には、スポーツ界や芸能界のスーパー・スターが登場する。

スポーツの儀礼化ほどに明確でないのが、さまざまな政治的プロセスにおける儀礼化と夜のニュース番組の儀礼化である。プロ・フットボールや伝統的な儀礼と同様に、政治集会や選挙放送、そして夜のニュースはテレビによって新しい形を与えられている。

まず最初に政治集会について見るとき、おそらく、さまざまなレヴェルの人間関係において行われているもののすべてを知ることができないであろう。すなわち、現実的にこうした集会を「報道する」ことはできないのである。しかしながら、テレビ報道がここ二十年間にわたって増加したのにしたがって、視聴者たちは今何が起きているかを認識し始めたのである。確かな、そして複雑なカメラ操作は視聴者に政治的な現実を知らせてくれるのである。テレビによるさまざまな集会の生放送によって、テレビの視聴者さえもが、ある種の政治的な認識を与えられるのである。確かにあちこちに配置されたカメラでも近づけない行動が続々と起こっており、また議員も報道されないような種類の政治行動に関わっている。しかし、集会のテレビ放送は大衆参加の新しい可能

性を開いたのであり、テレビ画面を通じてアメリカ中の何百万人もの視聴者が参加するようになったのである。

党大会は、党大会それ自体が儀礼的要素を含むために儀礼と化す。イベントは、型どりのオープニングから閉会を告げるセレモニーまで四日間わたって行われるが、普通ではない場所、特別な時間の境界で開催される。おそらく、実際にその場に居合わせた人たちは、テレビで見えていた人の方が、その空間をよりドラマティックに感じたであろう。テレビの解説者は、しばしばそうした光景を、何台ものカメラを使ってくまなく映し出すことで描写する。視聴者は、大会会場、聴衆席のフロアー、廊下というように、ある場所から別の場所へと移動する。最も興味をそそられるのは報道記者席である。そこではテレビの解説者が高僧のように座っている。何人かの政治家がこの特別な空間でインタビューされている。

イベントの中核の儀礼化、つまり大統領候補と副大統領候補の選出は、党大会によってさまざまな異なっている。イベントは、実際にスーパー・ボールとそっくりになることがある。敵対するクォーターバックによって本

当の乱闘が繰り広げられ、ファンはスタンドで吠えたけりラッパを吹き鳴らす。また、予備選挙がおおよそ本選挙の結果を決定してしまっているような場合は、候補の選出はまったく儀礼的なイベントと同じである。光の神と闇の神との戦いといったものが、たとえ行われているように思えても、少しばかり選挙結果に通じていれば、それは豪華な儀礼的演劇への誘いであることがわかる。

一九七六年に行われた共和党の党大会は、スーパースタールにそっくりだった。テレビの解説者は、「スタジアム」の一角を占める彼女のチームに微笑みかけるフオード婦人と、いま一方のチームに微笑むレーガン婦人の「婦人の戦い」に注意を向けさせさせたのである。候補選出のドラマの間に生じたフロアーの分裂は、この大会の恒例になった。フオードが大統領候補に選出された最後の晩になっても、レーガンの支持者たちは、レーガン支持をやめなかった。直接大会に参加した者とテレビでの参加者すべてが大会会場での熱烈な和解を期待した最後の瞬間になっても、群衆は依然として不一致を露呈していた。レーガンの支持者は容易に負けを認めな

ったのである。

おそらくカーターが、一九七六年の党大会以前に、予備選挙での勝利によって、好運にも候補者のノミネートに勝ちを収めていたために、民主党員は、故意にもしくはなにげなく、イベントを儀礼と化す目論見を持っていたのである。実にさまざまな人々がこの儀礼的ドラマを飾り立てた。プログラムのあちこちで、政治のヒーローやヒロインが脚光を浴びた。最初の夜を燃え上らせたのは、黒人女性で力強い演説をするバーバラ・ジョーダンだった。彼女の存在がどれほどの効果をもたらすかは分かっていなかったが、彼女はアメリカ中の女性を奮い立たせたのである。それからの大会の四日間は、シーザー・ス・チャベス、イボンヌ・B・バーク、ジェリー・ブラウン、ヒューバート・ハンフリー、ジョージ・ウォーレスといった、リベラルであれ保守であれ、誰にとつても政治の典型となるようなものであった。徴兵に反対する者までも壇上に登った。後になって、イベントは計画通りだったと報道されたが、カーターがペンシルヴァニア・アヴェニューを歩いたことが、儀礼的な意図を強め

る結果になった。

いま一つ通常の大会ではみられなかったものがあつたが、それは、画像の同時放送である。さまざまな演説者が話しをしては去るが、フロアーのカメラは、演説者の画像と同様に、聴衆の反応をも映しだした。代議員が一票を投じたときには、大会のフロアーからの映像に加えて、カーターの宿泊していたホテルの一室からの生中継の映像が織り込まれた。視聴者は、カーターが、かれの母親や娘、孫と座りながら、大会フロアーで会議が進行していく様子をテレビで見つめている、その様子を見ていた。そして、圧倒的な投票数によって彼が大統領候補に確定した勝利の瞬間、二つの場面が織り混ぜられた。視聴者は、テクノロジーの魔術によって、大会フロアーで記者に囲まれたカーター婦人の映像と同時に、ホテルの部屋で勝利者となったカーターの映像を見たのである。視聴者が見たものは、カーターが自分自身を見ているのをまた見ているというものであった。カーターは、この種の象徴的な放送を認めることにまつた信頼を有していたに違いない。

一九七六年の民主党大会の最後の特別放送番組は、

最後の演説の後に放映された。マーティン・ルーサー・キング牧師の兄が祝祷を捧げた。視聴者はテレビで、彼の表情豊かな顔を見、南部の黒人説教師が民主党に祝福を与えながら神と交信するのを聴いた。視聴者はまた、カメラの移動にともなつて、顎に手をあて、祈りに唱和して「アーメン」とつぶやくカーターの顔を見たのだった。そして、ジェリー・ブラウン、ヒューバート・ハンフリー、コレッタ・キング、ジョージ・ウォーレスといった人たちの映像で大会会場の画面を埋めつくしながら、ヒーローとヒロインのパレードが始まった。誰もが和やかなワルツを踊るように大会会場を行き交っていた。すべての人が「勝利を我らに」の合唱に加わった。企業提供による商業番組が、党大会という儀礼をアメリカ国民のそれぞれの家庭へと運んだのであった。党大会では横断的な政治的見解が述べられる一方で、コマーシャルは、自動車、ドッグ・フード、下着、石鹸などの生産と消費を視聴者に印象づけた。コマーシャルの中には、双方の党大会で流されているものもあった。たとえ

ば、CBSでは、プレイテックスとフォルクスワーゲンが民主党と共和党の両方のスポンサーになっていた。

一九七六年の十一月、秋にテレビ中継された熱烈な討論の後に、政治のコマーシャル番組、世論調査、大統領選出の夜が続く。アメリカの三大ネットワークは、図や、とくに色とりどりのライトや地図、コンピュータといったそれぞれ独自の環境と構成を用意した。解説者がいくつかの戦略地点から生放送できるように、国内の異なった地点で複雑な通信網が設定された。広告主が勢ぞろいし、商品を売る準備が進められた。カメラとリポーターは、選挙運動本部と祝賀会場として用意された場所に配置されていた。テレビ画面と政治に関心を持つ視聴者は、すぐにまぶしいライト、アメリカの赤、白、青の地図、得票率と投票数で満たされる。かなりの数の選挙区が選挙結果を報じれば、グラフや選挙結果予測が、視聴者の画面にすばやく映しだされるのである。

大統領選挙の夜が、党大会ほどには儀礼的構造を持っていないかもしれないとしても、依然としてかなりの儀礼的要素を含んでいる。ネットワークは、大統領選挙の

夜を占有し、スポーツ・イベントとして儀礼化してきた。ネットワークは、情報とエンターテイメントを提供する一方で、何百万人ものアメリカ人をひとかたまりの興奮した大衆へと変容させた。

候補者とその家族は、大統領選挙の夜、しばしば好位置に据えられた。コンピュータが一九七六年のカーターの勝利を映し出したときに、ABC放送はジョージア州にいた母親のリリアン婦人の映像を送り出した。勝利の瞬間、リリアン婦人は立ち上がって、コートを脱ぎ捨て、「ジミーは勝つ」と書かれたTシャツを見せた。彼女の後ろには、カーターのミニ・コーラス・ラインが、同じように「ジミーは勝つ」のTシャツを見せていた。後になって、視聴者は、ジミーとロザリンがブレインズの友人に会いに帰ったのをテレビで見た。

大統領選挙の夜の儀礼は、敗者が正式に敗北を認めて初めて終了する。一九七六年の大統領選挙の翌朝、ジェラルド・フォードの代わりに、フォード婦人が優雅にそして威厳を持って彼の声明を読み上げた。フォード氏は、声が枯れてしまつて話せなかったのである。大統領選挙

の夜は終わりを告げた。四年後の選挙までこうした儀礼は存在しないだろう。しかしながら、一九七八年の中間選挙の報道をたまたま見た人は、新しい報道体制が試行されていたのを見ることができた。新式のライト、新しい鮮明な地図や図表、そしてコンピュータが、一九八〇年の選挙運動キャンペーンに向けて用意されていたのである。

一九八〇年に、テレビを見ていた人たちは、共和党党大会にいつもとは違った儀礼的要素がいくつかあるのを見た。ロナルド・レーガンの副大統領指名をめぐるドラマティックな動きが、すこしずつ支持者の間に噂と憶測を呼び起こしていた。党大会の三日目の夜、ウォルター・クロンカイトは、副大統領候補のジェラルド・フォードとその夫人ベティーにインタビューを試みた。視聴者はこのインタビューで、フォードのこれまでにない慎重さを目撃した。明らかに、フォードは依然として「副大統領」としてレーガンの候補者名簿に名前を連ねるかどうか思案していた。一部の解説者は後になって、インタビューから、フォードはテレビの視聴者に向かって話をす

ると同時に、レーガンとの交渉を続けていたと考えた。レーガンとフォードの候補者名簿をめぐる噂はその夜駆け回り、二人の間の密約は破棄されたのではないかという印象が広がった。やがて、落胆した志願者ジョージ・ブッシュは敗北を認め、「すべてお膳立ては整ったようだ」と述べたと報じられた。ブッシュは明らかに、候補者名簿はレーガンとフォードであろうといわれて候補を諦め、党大会での演説を数分で打ち切ったのである。

投票数の確認の間に興奮はつづき、そして、予期されたように、レーガンが晴れの副大統領候補として迎えられた。同時中継で、党大会のフロアとレーガンのいたホテルの部屋から生で映像が送られた。幸福な勝利者と彼の家族は、テレビに映った彼らの姿と党大会の映像を併せて見ていた。しかしながら、楽しいデモンストレーションのまっ只中で、すべてのネットワークは、フォードとレーガンとの密約が御破算になったことを視聴者に暗示する映像を送り続けていた。そしてレーガンが慣習を破って直接会場におもむき、代議員に話しかけ彼の選択を述べたときに、興奮は最高潮に達した。

党大会の四日目、最後の夜、共和党員の一体感はやがてゆるゆるにいきわたっていた。ゴールデン・アワーは幸福と調和で満たされていた。祭典が正式に終了したとき、高貴な共和党員は新しく生れ変わり、戦いに備えて、テレビのスイッチを切った。

一九八〇年の党大会のスタイルは、一九七六年の二大政党のスタイルを逆にしたものであった。共和党の党大会は、四年前にジミー・カーターが民主党から得た儀礼的確認と同じレーガン候補の儀礼的確認であった。逆に、民主党の党大会は、一九七六年に共和党員がしたように、党内で分裂した覇権を争い、それを隠さなければならなかった。しかしながら、党大会のスタイルの相違があったとしても、レーガンとカーターは、選挙運動をゴールデン・アワーに見ている大衆の前で、自らの選挙運動を儀礼として行ったのであった。独立候補のジョン・アンダーソンは、彼の候補確定を劇的にするためのこれらシンボリックな時間、空間、あるいは儀礼的様式をなんら持っていなかった。

一九八〇年秋、テレビの視聴者は、選挙運動での演説、

ボートの定期的放送によって、儀礼的養分を絶えず摂取している。そして毎晩必ず夜のニュースが流される。

古代の儀礼は、その参加者に世界がどのようなものであるかを説明し、儀礼の中で演じられた神話が信仰者によって世界を解きあかしてきたということは、思い起こされてよいだろう。ニュース放送を解釈するために神話を用いることの難点は、「神話」という用語が誤解されている点にある。神話は、しばしば「偽り(falsehood)」や「ファンタジー」と訳される。儀礼の中で演じられる神話は、現実に関する真理を知り学ぶための方法であったということが忘れられている。この神話の語源と説明の質こそが夜のニュースにおいて見いだされるのである。ニュースは、現代人が現実を理解するための公共のシンボルを表明している。

夜のニュースの儀礼的力は、部分的に、その規則的に定まった時間と同一形式の番組内容に負っている。毎晩きっかり一時間、視聴者は自分の好きな全国ニュース番組にチャンネルを合わせて何が生じたのかを知るのである。新聞を読むのに、決まった時間と場所があるわけ

投票、そして最終的な二人の討論によって、主要な候補者を追いかけていた。討論それ自体が、さらに勝者と敗者をめぐる投票と論争を呼び起こした。そして十一月四日が始まった。投票者は、その日のうちに選択を決定し、夜には、コンピューター、光の点滅、色とりどりの地図や解説者のドラマティックな動きを片時も目を話さずに追いかけた。TVガイドは投票結果が明らかになるおおよその時刻を記すなど、視聴者にイベントの見所を提供していた。午後十時前、解説者とカーター大統領は同様に渋い表情をしていた。ロナルド・レーガンが大統領選挙に勝ったのである。投票者はチャンネルを合わせて、穏やかで信頼のおける人物としてテレビに映った、俳優の政治家に共感を覚えていた。打ち興じ熱狂的になったレーガンの支持者は、一九八一年のレーガンの大統領就任演説と演説前の馬鹿騒ぎを待っていた。

スーパー・ボールやワールド・シリーズは一年に一度、党大会と大統領選挙は四年に一度である。しかし大衆は、多少豪華さの点では欠けるとしても、フットボール、野球、バスケットボール、ホッケーといったプロス

はない。しかしながら、夜のニュース番組の放映は、秩序と出来事の共通の受容である。この集合視聴は共同体に連帯を提供している。なぜならば、無数の市民が現行の現実に対する同一説明にさらされているからである。

夜のニュース放送の構成には、定型化されたパターンがある。三十分の中の各単位は、重要さの程度に応じて丹念に組み立てられている。言葉や図によって、視聴者は何が「真実」であるか、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、そして宇宙において何が起こっているかを感じとる。夜のニュースは、家族や隣人といった直接的世界の外で、物事がどのようにになっているか、何が予期されるかについて視聴者に語りかける。

定時的に流されるスポンサーの宣伝には、国内の出来事、国際事件、そして宇宙に関する出来事の情報が混在している。多くの人に嫌われているにも拘らず、コマーシャルは、番組の放送を可能にするのに加えて、人々を慰撫する役割を持っている。ニュースで流される多くの「真実」は、容易に解決しない悲惨で悲劇的な国内外の出来事をしばしば取り上げる。コマーシャルは、未解決

のムードを断ち切る。事実、人々は慰められ、中には防臭剤や便秘薬、歯磨き粉、簡易朝食、抗ヒスタミン剤、そして車のオイルによって、十二分に解決される問題もある。コマーシャルは、つらいニュースや矛盾に満ちた問題の説明に制限を設ける。コマーシャルは、そうでなかったら慰めを見いだせないことに慰撫を与えるのである。

交互に放送されるニュースとコマーシャルは、ともにしっかりとパッケージされた現実のシンボリックな記録を我々に与える。ウォルター・クロンカイトが「……まあそういったところでしょう……」と述べる時に、人々はその知識を信用したのである。多くの人々はニュースが不完全な情報であることを、そしてしばしば誤った報道を流すことを承知している。しかしながら、依然として多くの人々にとってカメラは嘘をつかないのである。テレビによって儀礼化されたシンボルは「現実」となる。

社会学者のハーバート J・ガンズによれば、国家の要人の行動や言明を報道するときには、ジャーナリストは重要な機能を果たしているという。そうすることにお

いて、ジャーナリストは国家や社会に対する我々の思考を形成するのに寄与している。さらに、出版物やエレクトロニック・メディアによって、彼らはたえず我々にこれら人間が作ったものの、つまり「国家」と「社会」の現実と力を思い起こさせてくれる。ジャーナリストは、国家の指導者の地位を強める一方で、「しばしば国家や社会から遠く離れた小社会に生きる聴取者に情報を提供する」ガンズは次のように述べている。

聴取者が本当に彼らに関する情報を必要としているかどうかは重大な問題であって、私には答えることが出来ない。ニュースはそうした情報を供給していると言えれば十分であろう。しかしながら、人々がニュースに遅れずについていくというときに、人々はまた、国家や社会との接触を維持していると述べているのかも知れない。⁽⁹⁾

ジャーナリストの主たる機能の一つは、ガンズの見解によると、コミュニケーションのための「シンボルの闘

技場」もしくはコミュニケーションのための公共の場の提供である。多くの人々が彼らのメッセージを取り入れ、そして他のメッセージを排除しようとするために、シンボルの闘技場は政治的闘争の場となり、それを運営することは、主要な政治的問題である。

多くの国々において、権力を握る政府がその運営者であるがために、問題は排除されている。またニュースの組織やジャーナリストが、政府が拒否権を保持しながらも、その闘技場を営んでいる国もある。アメリカでは、ニュース会社は名目だけの運営者であって、ニュース組織とジャーナリストが実際の運営母体となっている。そのプロセスにおいて、それらはまた個人や集団をメッセージにはって律し、そうすることでシンボルの闘技場における秩序を維持している。⁽¹⁰⁾

エレクトロニック・ポリティクス

伝統的な儀礼は社会システムを維持するが、それはシステムを変えてしまうこともある。アメリカ研究の学者

ロナルド A・ディラツツルは、儀礼が我々の能力において、保持すると同時に再び秩序立てる役割を果たすという創造的な役割について書いている。「儀礼は現実の既成化した姿のリズムと形を賞賛し堅固なものとするかも知れないが、また、新しく生まれた様式の形とリズムを⁽¹¹⁾読え、表現するかも知れない」。

今日テレビの儀礼的なパターン化は、我々が政治のプロセスについて考え、参加する方法を変えつつある。一九七六年と一九八〇年の大統領選挙の選挙運動のテレビ放映は、テレビがなかったときにはほとんど国民的な関心と呼ぶことのなかった活動を大々的に取り上げているのである。テレビ討論、地方支部の幹部会議、そして大統領予備選挙と拡大されていく報道は、政治におけるゲーム的要素である。イベントは特別な注目を浴び、大統領予備選挙の選挙運動の周期的運動は、夜のニュースのおきまりの内容となった。地方支部の幹部会議は、決定が地方の政治家と労働者との直接の接触を基礎にしてなされる地域的な出来事である一方で、現在では、野心的な大統領候補の人気を高めたりあるいは落したりしう

る瞬時のメディア・イベントとなっている。地方支部の幹部会議や大統領予備選挙は、スーパー・ボールのプレイ・オフのようなものである。事実、プロスポーツで用されている用語の一部が政治の領域でも用いられている。一九八〇年六月三日の水曜日は、その日にきわめて多くの代議員選出が行われ、この選挙の結果、かつてない数の代議員が決定したために、スーパー・チューズデーと呼ばれた。

視聴者はテレビのニュースによってユニークな政治的横顔を持つ候補者を見、話しを聞いた。候補者の映像は、まるで劇的なエンド・ランか、うまくロング・パスを成功させたフットボールのヒーローか何かのようだった。テレビ・カメラは当然ながらファンブル(失策)をも映し出した。ヒーローのような動きや失策のリプレイが、地方局と全国ネットで四日間も繰り返し放送された。統制に対して強固に反対するニュー・ハンプシャーの聴衆を前にして、拳銃の規制に好意的な発言をしたジョン・アングダーソンは、テレビの視聴者に勇気ある候補者というイメージを与えた。

テレビのニュースは、選挙運動期間中、劇的な動きを伝えることもある。毎晩視聴者は、テレビの前の自分の座席に座り、こうした劇的な出来事を「生で」見るのである。その結果、この毎日の各州の代議員選挙の儀礼化は、大統領候補の選出のプロセスを大統領選挙からそれ以前に行われる選挙へと移行させた。代議員選挙における華々しい勝利を基盤として、一九八〇年一月初旬までに、ロナルド・レーガンが共和党の大統領候補者になるための十分な代議員を獲得したことは明らかであった。一九七六年のカーターの時と同じように、彼にとって党大会は儀礼的な祭典だったのである。

選挙運動の質と速度が変化したことは、解説者や評論家によってさまざまに解釈されてきた。一九八〇年の有力な大統領候補であったジェリー・ブラウンは、政治のプロセスは、「ワイド・世界のスポーツ」の一部になってしまったと述べた。政治評論家で、「マクニール／レーラー・リポート」の解説者も勤めるケヴィン・フィリップスは、マサチューセッツ州とバーモント州の代議員選挙を追跡して、選挙運動の「揮発的」性格に言及してい

る。

フィリップス ところで、まったく月並みな表現ではありませんけれども、……人々はまったくうんざりしております。自分たちがなにを望んでいるのかは、かにもく見当がついていないようですし、これら政治家が何なのか分かっていないように見えます。政治家はただテレビ画面を通り過ぎるだけであります。人々はジョージ・ブッシュについて、ジョージ・ブッシュがまったく突然に勝利するまでは何も知らなかったというわけです。あとからジョージ・ブッシュがどんな人物であるかを知ることになるわけで、そして、おそらくは、好きにはなれないな、というところでしょう。そこで他の政治家を探すわけですが、その結果、ジョン・アングダーソンが急浮上し、三十一%の支持を得ることになる。彼は実力以上に評価されたようですし、私はこのことをたいへん残念に思っています。それはメディアの過ちではなく、システム、メディアの相互作用、政治プロセスの断片化、長く引き伸ばされてし

まったことの過ちであります。しかしながら、確かに気まぐれであります。めちゃくちゃといってもいいかもしれません⁽¹²⁾。

しかしながら、「マクニール／レーラー・リポート」のホストの一人であるジム・レーラーは、結局かなりの数の人々が投票に向かうことになると指摘している。もう一人のゲスト、ロサンゼルス・タイムスのロバート・ショーガンは、次のように答えている。

ショーガン ええ、そうですね、そこが面白いところなんです。はつきりとはいえないんですが、それは第二段階だということでしょう。ちょっと前までは、かなりの数の人々は、ただ家にいるだけで、出版界は投票者の無関心ぶりを書き立てていましたが、今では我々はこの投票者のどうしようもなさを克服しました。これらいまましい人々は家にとどまろうとしました。彼らは投票に行きます。無所属投票者も投票場へと向かうわけで、その結果さまざま予想が混乱を

招くことになるわけだ⁽¹³⁾。

フォード財団の報道コンサルタントでハーバード大学政治研究所に所属するマーティン・リンスキイは、選挙プロセスにおいてメディアが及ぼす影響に対して積極的な姿勢を表明している。ボストン・グローブに掲載された「システムはきわめて順調に作動している」において、我々は「偉大な実験」に従事していると述べている。メディアが代議員選挙を強調することによって、「政治のプロセスが民主化される」。それは大統領の指名権が党のボスや特定の利益集団から取り上げられ、投票者へと委託されたためである。「我々は、投票者の良き判断と、アメリカのニュース・メディアが彼らに情報を流し続けることを信頼している」。システムに欠陥はあるものの、調査から、候補者と候補者の諸問題に対する立場を十分に理解していることが明らかにされている。システムが害を及ぼすよりは、テレビによる出来事の報道が積極的に貢献していることの方が有意義である。候補者自身が変化に対応しなければならぬ。

テレビは、これまで考案された中でもっとも早く、きわめて強烈で、普遍的なコミュニケーション・メディアである。現代アメリカにおいて、国家の指導者になろうと欲するものは、テレビ上で上手にコミュニケーションできる技術と、テレビへの登場が意志決定に必要な時間を短縮させるという優れて調和した感覚を持つていなければならない⁽¹⁴⁾。

政治と政治家は「社会のほとんどすべての局面に影響を与えている、より広範な真の改革に巻き込まれている。」ワシントン・ポストの編集者の頁の編集者であるフィリップ・L・ジェレリンはこう書いている。テレビは、選挙前の世論調査、投票、郵便を使った選挙運動のように、コミュニケーションとコンピューターの領域での技術的変革の一部である。彼は、政治における応酬といった、政治の出来事における変化について述べているが、その応酬たるや「テレビでの注意を引き、夜のニュースに候補者をのせることを純粋な目的として仕組まれて

おり、数百人などという人数ではない、数百万人が」見たり聞いたりできるのである。彼は政治とコミュニケーションの評論家であるダグラス・カーターの分析を引用しているが、カーターは「ロンドン・サンデー・タイムス」で次のように述べている。

わずか四分の一世紀の間に伸張した現象であるが、テレビは、本、演劇、映画、新聞、そして定期刊行物とは較べものにならないコミュニケーションの環境を造り上げた。その止むことのない電子信号の流れは……我々の思考だけではなく、我々が集団で考えるという作業に関わるやり方に対して根本的な影響を及ぼした。社会はこの環境の中を泳いでいるにもかかわらず、まったくその重要性を意識していない⁽¹⁵⁾。

ゲイリーンは、この変革はまったく悪いと言うわけでもないし、さりとてまったく善いともいい難いと結論している。この変革は、「政治システムに適応することができなければ、それを一掃してしまうかも知れない過度

に負担をかける思考のプロセスを脅かす」。

積極的もしくは消極的に考えるかは別として、毎晩テレビ画面の上を流れる儀礼化されたニュースのパターンは、我々の政治プロセスを変化させ、我々の共通の電子的環境を形成することに実質的に寄与してきた。さらに、夜のニュースの構成は、他のメディアと同様に、政府の行為や権力を握る政治家への絶えざる批判を育成してきたのである。

注

(1) W. E. H. Stanner, "The Dreaming," *Reader in Comparative Religion, An Anthropological Approach*, eds. William A. Lessa and Evon Z. Vogt (Evanston, Ill. & Elmsford, N. Y.: Row, Peterson and Company, 1958), p. 518.

(2) 神話と儀礼は、さまざまな領域の研究者によって、ときにはまったく異なった意味で、用いられ解釈される用語である。一部の研究者は、神話と儀礼をふたつの異なった経験を秩序付ける様式と考えている。神話は、独立したシンボル表現を与えられることによって、異なった文学作品や芸術作品において客観化される。対照的に、神話と儀礼は本質的に相互に関連すると主張する研究者

- もいる。彼らは、儀礼において演じられるとき神話は本物となり可視となると強調している。神話は儀礼において生命を獲得し、交信する者は儀礼を体験することによって神話の中に生きる。文字として現実化されるか儀礼の中で現実化されるかは別として、神話は、神話を科学的正当性に委ねることのないままもまた次元の人間の行為を表明している。神話は、エリック・フューゲリンが人間の行為における「盲点」が始まりと超越の神秘と呼んだものの適切な表現である。(Eric Voegelin, *Order and History*, Vol. 1 [Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1956], p. 2.)
- (3) Johan Huizinga, *Homo Ludens : A Study of the Play-Element in Culture* (Boston: Beacon Press, 1955) pp. 26-27.
- (4) Hugo Rahner, *Man at Play* (New York: Herder and Herder, 1972), pp. 8, 10.
- (5) Victor Turner, "Process, System and Symbol: A New Anthropological Approach," *Dædalus*, Summer 1977, p. 61. 「私の個人的な考えでは、人類学は、構造、均衡、機能、プロセスに対するシステム、不確定性、柔軟性といった概念を強調することから、つまり、『である (being)』から『になりつつある (becoming)』へと心を開くべきだと思う。」
- (6) Heb. 11: 1.
- (7) イェール大学神学部の典礼学教授のアイダン・カバ

- ノーとの討論は、伝統的儀礼と現代生活における儀礼の代替との比較対照を行う際にきわめて有意義である。
- (8) Mircea Eliade, *Myth and Reality* (New York: Harper and Row, 1963), pp. 140-141.
- (9) Herbert J. Gans, *Deciding What's News* (New York: Random House, 1979), p. 298.
- (10) Ibid., p. 299.
- (11) Roland A. Delattre, "The Rituals of Humanity and the Rhythm of Reality," *Prospects : An Annual of American Studies* 5 (1979).
- (12) WNET/Thirteen, Transcript from *The MacNeil/Leher Report*, "The Massachusetts and Vermont Primaries," air date: March 5, 1980, p. 7.
- (13) Ibid.
- (14) Martin Linsky, "The System's Working Just Fine," *Boston Globe*, March 12, 1980, p. 15.
- (15) Philip L. Geyelin, "New Technology and the Evolution of Politics," *Yale Alumni Magazine and Journal*, January 1979, p. 12. (米國・宗教学者)
- 訳・石井研士(いしけんじ・文化庁宗務課専門職員)
木塚隆志(きづかたかし・東京大学大学院)
- 〔追記〕本論文は、G・T・ガートルズ著「テレビ儀礼」の第一章を訳出したものである (Gregor T. Goethals, *The TV Ritual*, Beacon Press, Boston, 1981)。